

Aグループ

田村寿寿栄（今江小）

山田ひろみ（国府小）

田中堂子（芦城小）

唐木里佳（符津小）

内藤由希子（栗津小）

土山和美（犬丸小）

上田美由紀（木場小）

森 三保（波佐谷小）

Aグループ

「言葉の力」を家庭で育てよう

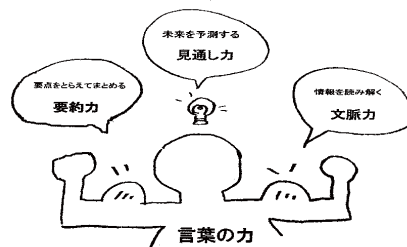
はじめに

6月15日の田中恵子先生の講演『未来の宝のために』では、子どもたちが、これから社会の中で直面するであろう課題に、柔軟にかつたくましく対応し、社会人として自立できる「生きる力」を家庭でどう育てていくかを「食」「睡眠」「お手伝い」「言葉」「知恵の継承」などの観点からお話ししていただきました。

その後、グループで話し合う中、社会で人と関わって生きていくには、人間関係を形成する能力のひとつである「コミュニケーション能力」が大きな「生きる力」となると感じました。そこで、子どもたちが、相手の話を理解したり、自分の思いを伝達したり、きちんとかみあった会話ができるというような「言葉の力」を身につけるため、家庭でも何か取り組みが出来ないかと考え、明治大学教授 齋藤 孝先生の著書「言葉の力」は家庭で伸ばす』と『実践母親塾』を参考にしてまとめてみました。

「言葉の力」を高めるためには、以下の3つが重要となります。

1. 要点をとらえてまとめる 「要約力」
2. 未来を予測する 「見通し力」
3. 情報を読み解く 「文脈力」



これらの力を育むための取り組みやすいトレーニングをご紹介します。

「言葉の力」を育てるトレーニング

1、日記を書こう →「要約力」のトレーニング

- ・日記を書く・・・1日を要約する練習
 - ① その日の出来事を箇条書きにする
 - ② 他の日とちがうことを探す
 - ③ 変化があったことを書く

2、見通しノートをつけよう →「見通し力」のトレーニング

目標を立て、その達成のために優先順位を決め、見通しを持つ力を育む

- ・見通しノートのつくり方
 - ① 大人になった時の目標を書く
 - ② そのために必要な進路の目標を書く
 - ③ 目標を達成するためにがんばることを書く

3、3色ボールペンを使って本を読もう →「文脈力」のトレーニング

客観部分と主観部分を分ける練習

- | | |
|-------------------|----------------|
| 「赤」・・・客観的に“すごく大事” | } と思ったところに線を引く |
| 「青」・・・客観的に“まあ大事” | |
| 「緑」・・・自分の主観で“面白い” | |

4、日常会話の中で積極的に慣用句や四字熟語やことわざを使おう

慣用句・・・日本語の奥行の深さを表すことができる

(体の一部を用いた表現が多い)

例： 顔が広い、涙をのむ、首を長くして待つ

四字熟語・・・事態を一举に把握できる言葉

例： 一期一会、危機一髪、起承転結

ことわざ・・・言葉自体が技になっていて、生きていくための知恵を
伝承しているもの

例： 転ばぬ先の杖、好きこそ物の上手なれ、短気は損気

5、音読をしよう

名文を自分の身体にしみ込ませることによって、正しい日本語の感覚が身につく。

- ・親がまず日本語らしい抑揚で、意味のまとまりごとに、やや速めのスピードで音読する。そして、それを子どもが復唱する。

6、いっしょに見ながら会話しよう → コミュニケーション能力を育む

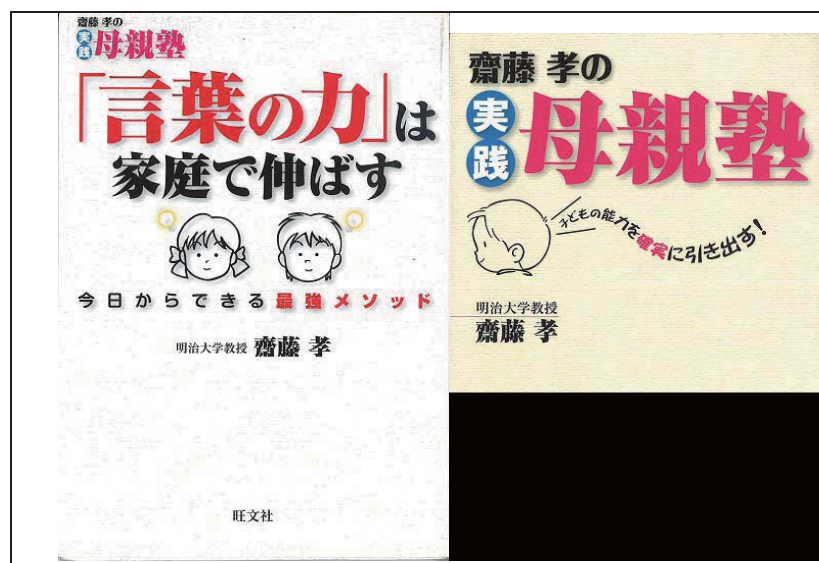
いろいろなものをいっしょに見ながら会話を続けていく

(例えば、本、映画、テレビ番組、アニメ、マンガ、子どもといっしょに行った美術館、コンサート、スポーツ観戦、山や海などの自然など)

7、いっしょに新しい世界を楽しもう

- 自己肯定力を育み、前向きに努力しようという思いにつながる
(例えば、音楽、美術、スポーツ、遊び、マンガなど)

参考文献



まとめ

以上の7つのトレーニングの中には、学校の宿題として出るものもあり、気軽に取り組めると思います。

あるお子さんのケースでは、部活動の指導で1.の日記と2.の見通しノートを合わせたような形式のものを書き始め、続けたことで、要点をまとめて書く力や前向きに考えていく力がついたという効果が聞かれました。

それぞれのトレーニングを“期待出来る効果”を意識しながら実践し、おしつけにならないよう気を配りながら、家庭のあたたかな雰囲気の中で継続していけたらと思います。

おわりに

講演中、田中恵子先生より 「おかあさん！ がんばれ！！」 と、力強い応援メッセージをいただき、子どもたちを「生きる力」が身についた人間に育てていく責任を強く感じました。

齋藤孝先生は、小学生を「子どもの伴走が出来る時期」とされています。

家庭、学校、地域の協働で成り立つ子どもたちの成長。その家庭での役割を考え、子どもたちのしあわせを願いながら、伴走を楽しみたいと思います。

今回、このように子どもについて語り合い、学ぶ機会をいただけたことに感謝いたします。

